



前挽大鋸
桃山時代以降、製材の主役とな
ってきた。写真は明治期のものと
推定される。



縦挽鋸
(伏見住・谷口清兵衛作)
縦挽だが「木の葉型」鋸から
分化した初期の形状をとどめて
いる。

Steel 鉄の点景 Landscape

世界最古の木造建築物・法隆寺をはじめとして、さまざまな寺社建築、庶民の家屋など、あらゆる面で、わが国の文化に注目する時、そこに「木の文化」と呼べるような側面があることは見逃せない。だが主役が木であるにせよ、その根幹にあったのは、精妙な鉄の道具であったことは否めないだろう。今回は、そうした「木の文化」を築いてきた鉄の道具の中から、とくに製材の場で主要な役割を果たしてきた鋸にスポットを当ててみた。

木の文化を創った鉄

のこぎり

鋸

打ち割りから製材用鋸へ

深海魚の頭のようなずんぐりとした写真上の鋸は、前挽^{まえびき}とよばれるもので、製材に使われる縦びきである。明治時代の中頃に機械製材が普及する以前は、もっぱらこの前挽によって製材が行われていた。たとえば、大きな普請があった時には、木挽とよばれる製材職人が集まって、現場近くで必要な寸法の材を前挽で切り出した。さらに小さな材は、前挽で切り出した材を鑿^{かがり}と呼ばれる小型の縦びき鋸で、ひき割りして作った。

歴史のうえで前挽鋸が登場するのは、史料によれば桃山時代のことで、それ以前の製材は、大鋸^{おが}で行われていた。大鋸とは、大ぶりの木製のフレームに取り付けた背丈ほどの鋸を両側から2人で引き合うもので、今日われわれが鋸として描くイメージからはほど遠いものである。中国大陸経由で室町の頃、入ってきたものだと考えられているようだ。鋸挽きで出た木の粉を「おがくず」というが、その語源はこの大鋸にあるといわれる。だが道具としてかなり大掛かりなものだったこともあってか大鋸が一般に製材の主役として使われたのは、室町から桃山に至る比較的短い期間だった。やがて小型で1人で使いこなせる前挽と入れ替わっていったようである。前挽鋸に類するものは、他国にはあまり例がなく日本のオリジナルの形と考えられる。「木の文化」ともいわれる精妙な木造建築や工芸品は、いわば独特なこれらの道具を大きな源のひとつとして生み出されていったとも考えられるだろう。大工道具の多くは消耗品であり、文化財としては扱われてこなかったこともあり、今日まで形をとどめているものは少ないが、考えてみれば、歴史を築いてきた影の功労者といえなくもない。

大鋸が入ってきたのは室町の中頃だろうといわれているが、それではそれ以前の製材は、どのように行われていたのだろうか。実はそれまでは鋸での製材はしていなかったらしいというのが答のようだ。法隆寺の一部に鋸の痕跡が見られることから、鋸そのものはかなり古くから存在していたであろうことが推測されている。だがそれらは横びきのむしろ細工用、加工用といったもので、製材的な性格での使われ方はなかったらしい。材を切り出すためには、斧、楔、割りのみなどが使われていたと

考えられる。つまり打ち割りによって、角材や板を切り出していたのである。

打ち割りで材を切り出すには、木目にそって刃物を打ち込んでいくわけだが、スパッときれいに割るには、材そのものの質がよほどよくなくてはならない。木目のそろった檜や杉などの針葉樹でなければ、まず無理だ。これらの良材が都市近辺にも豊富に分布していたことが古代に製材用鋸が必要とされなかった要因だろうと、今日では考えられているようだ。それが室町時代になると、さすがに檜や杉が不足し、けやきや松を使わざるをえない状況になってくる（都市から遠隔の地には良材があったが当時の輸送技術では供給ができなかった）。けれど木目が乱れた樹種では、打ち割りで真っ直ぐな材をとることは難しい。そこで大鋸による製材が取り入れられるようになったのだろうと考えられている。だが輸入技術であった大鋸も、比較的短い時間のうちに前挽鋸という国産技術に改良されていったのである。大鋸から前挽への交替は、今日風にいえば一種のダウンサイジングといえるだろうか。

それにしても都市部近辺のみでとはいえ、人為の活動が樹木を減らし、それが技術や生活を変えていったというサイクルは、何か今日にまで通ずるものを感じさせる。機械製材で南洋材を大量に消費していく今のサイクルは、どんな将来へと通じていくのだろうか。

後世に残りにくい生活の道具

閑話休題、大鋸以前の鋸は、おもに横びきの加工用のものだったことは述べたが、絵に描かれた史料から、それらの多くは「木の葉型」といわれるものだったと考えられている。「木の葉型」とは、名のとおり木の葉を葉脈で半分に切った形をし

ており、曲線側に歯がつけられている。先が細く尖っていることもあって、狭い隙間などに差し込んで使ったり、細かな細工をするのにも便利な、一種の万能鋸のようなものだったと考えられている。「木の葉型」の鋸は中世の遺跡から発見されているが、腐食が進んでいて原形をとどめておらず、史料や絵巻物などからの推定によって、実物を想像するほかはない。

写真の下のは、縦びきの鋸だが、現存するものの中では「木の葉型」鋸に近い形状をとどめており、「木の葉型」から機能分化した初期のものだろうと考えられている。

大工道具全般にいえることではあるが、生活の道具であり、消耗品であるところから、古い道具のうち、今日まで残されているものは、きわめて限られている。とりわけ鋸は、薄く腐食しやすいことや、使いながら目立てを繰り返し、使いきっていくことから、いっそう残りにくいようである。焼き入れ挟みで目立てした刃に丁寧に焼き入れをするなど、匠の技術が注ぎ込まれ、また多くの名人といわれる道具づくりの職人を出したわりに、後世には残っていかないのである。

ちなみに当協会では、昭和44年にわが国古来の製鉄法である砂鉄と木炭を使った「たたら製鉄」の復元実験を行い、玉鋼を得ることに成功しているが、その際、その玉鋼の一部を用いて、伝承の方法による鋸を再現し、さまざまな試験検査を通じて、日本古来の鋼と道具についてのデータを得ている。その成果は『日本の鋸』『たたら製鉄の復元とその鋸について』（いずれも(社)日本鉄鋼協会編）といった書籍に詳しくまとめられているので、関心をもたれた方はそちらもご参照の程。生活をつくってきた道具とその素材、性能を知ること、実は技術史としてだけでなく、文化を理解するうえでも重要な手掛かりになりうるだろう。[取材協力・写真提供：(財)竹中大工道具館]

(財)竹中大工道具館

日本建築を支えてきた手作りの大工道具を系統的に収集・保存し、展示を行っている。道具を通じ、工匠の精神と技術を後世に伝えていくことを目的に、1階「道具の歴史」、2階「木と匠と道具」、3階「道具と鍛冶」といったテーマで18,000点あまりの収蔵品を展示している。

毎週月曜日（祭日の場合は翌日）と年末年始は休館。



神戸市中央区中山手通
4-18-25
TEL 078-242-0216
JR・阪急・阪神＝
三宮駅より徒歩18分
JR・阪神＝
元町駅より徒歩10分

